

に變ことなし、又有栖川と云は葉の先皆上に向、これ又漢種なりと云、又豎に黄色の筋あるを黄金又虎の卷など、云、又葉の面白く背青きを晝夜と云、其外高麗雞尾等色々有、又兩根と稱するものは根の兩面より鬚根を生ずるを云、常の石菖にも多き中には自然に兩根になりたるものあり、又兩根を拵る法あり、常の石菖は皆根の腹より鬚を生ずる也、片根なるを以て、葉と鬚を剪て、根ばかりを豎に起て植置ば、兩方より根を生るなり、然れども久く植置時は、又常のごとく片根に返る也、又石菖を石に著るには、葉を剪て根を石へ添て、細き針金にて、まかと卷て、絶す水を

灌ときは、鬚根皆石に著もの也、花鏡曰、鼠糞蝙蝠屎を水に和し澆ば榮るといへり、  
〔草木育種下美花〕蘭あやめ草本 野土眞土ともによし、魚洗汁を澆ば花多し、冬は人糞を用てよし、あやめ

種類多し、紫は常なり、紫と白との紋あり、又鳶尾いちぢくもあやめの手入にてよし、又俗に扇菖花尾張國にてひおふぎあやめと名く、葉は射干ひさごいちにはつなどに似て、花はあやめに似たり、

〔剪花翁傳二三月開花〕鎌山かまやま溪蓀あやめ 花青紫形大し、開花三月中旬、方日向、地二分濕、土麤交、肥小便、春

芽出し前より花前まで、三四度澆ぐべし、分株春彼岸十日前にすべし、燕子花より高き所よし、水氣の少き方、まかるべし、

〔剪花翁傳三四月開花〕溪蓀あやめ 花白青、又姬あやめあり、花青し、いづれも開花四月上旬、方日向、地二分

濕、土えらばず、水氣は少き方よし、肥小便、芽出し前に入べし、芽出して後にも入べし、分株春彼岸十日前よし、略○中

花菖蒲 種々あり、開花紅は立春より百十日頃に咲也、紫は是に後る、事五日ばかり、瑠璃紺は又五日ばかり、白又是に五日許おそし、村雲綾、白紺綾、網綾、吹墨等の斑入あり、さて斑入に六葩のものもあり、是は三葩の八重なるものなり、咲頃ともに同じ、方日向、地三分濕、土えらばず、肥淡小便、芽出しの時より二三度そ、ぐべし、其外は用ひず、移分株春彼岸よし、